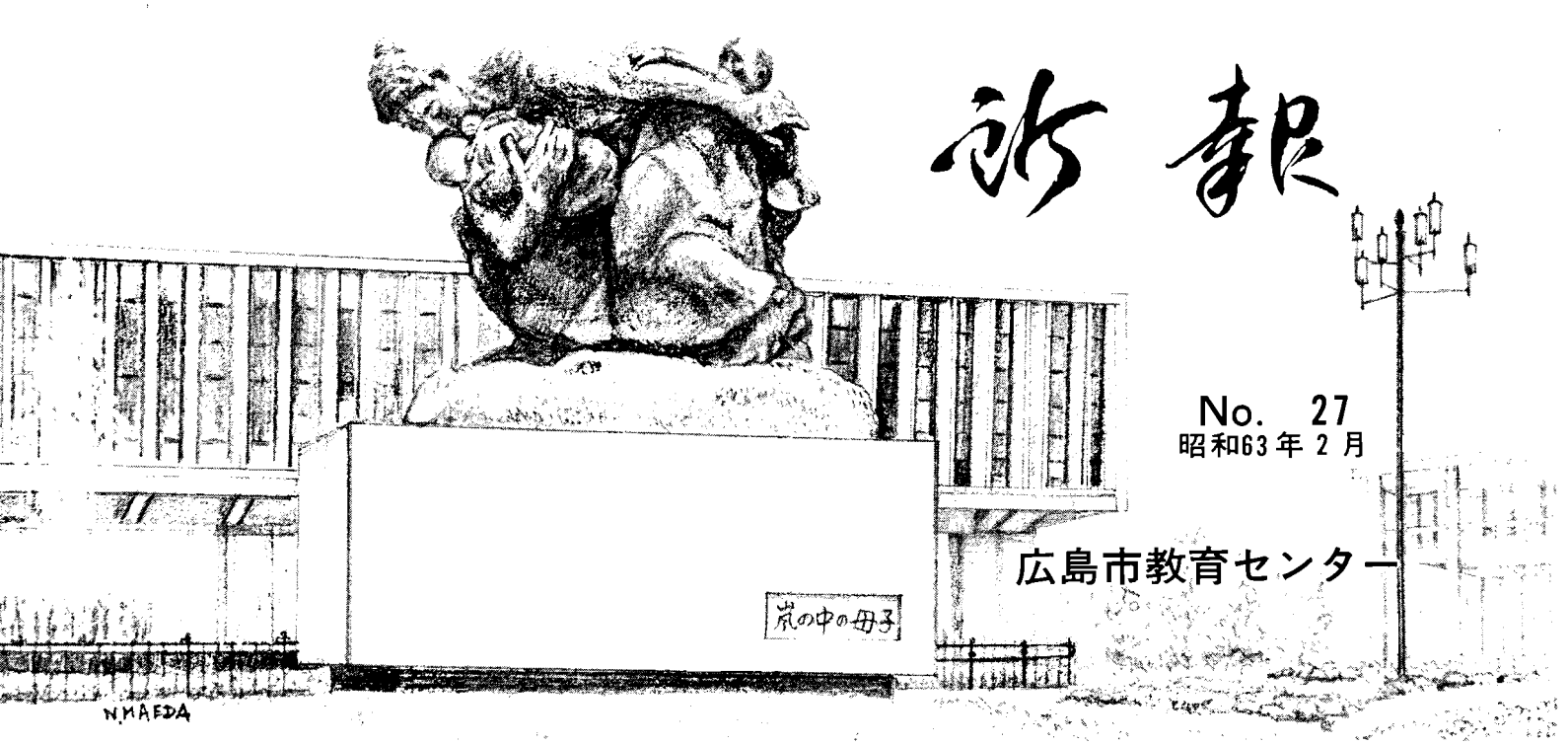




# 所報

No. 27
昭和63年2月

広島市教育センター


## 教　師　の　眼


安田女子大学助教授　坂　本　信　義

かつて、庭師から石を選ぶ慧眼(けい)のほどを聞いたことがある。庭師は庭先の大きな石を梃(て)子一本で軽々と動かす。石がくすぐったい所を教えてくれるので、そこに梃子を入れると石の方から動き出すというのである。つまり、重心を見抜いた技といえる。また、石には、静と動、あるいは陰と陽があり、それらを見抜いて、請け負った築山や泉石などに最もふさわしい石を選び、庭に据えて生かすのだという。

また、素人は、総じて石屋の庭先にごろりと置かれた石を、その石全体の形や色で好みのものを見がちである。しかし、石は土中に埋められ、どっしりと根を生やしたときの姿を想定して選ぶべきであり、地上に見える部分は、わずか八分の二にしか過ぎない場合だってあるのだともいう。

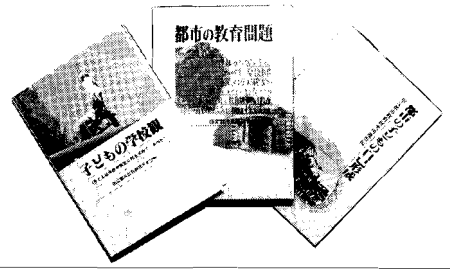
この慧眼、一朝一夕にならずではあるが、そこには確かで厳しいプロの眼がある。このことを、教育に置きかえてみるとどうであろうか。日々成長し続ける子供達を、庭石と同じように考えることは出来ないが、子供達を教え育てる教師としては、子供の実態を見詰め、本質や可能性を見抜く教師の眼が求められることには変わりはない。子供達は多様である。その個性や長所・短所も様々である。「心焉(ここ)に在らざれば視(み)れども見えず」というように、心の目、研ぎ澄まされた〝感性の目〟でないと見えるものも見えないであろう。

教師は、とかく成績によって子どもの行動を律しがちであるので十分心しなければならない。ある子供のちょっとした非をとらえ、教師が一方的に極めつけたような対応をすると、その子供もそうした行動に走るようになるという。また、ある子供は自分を否定的に見る教師に対し敵意さえいだき、その教科に興味・関心を失い、成績も悪くなっていくという。もちろん、逆の事例も多いが、ピグマリオン効果とか、ラベリング理論などによって、すでに説明されている考え方である。

子供達のもつ可能性を信じて、その長所を伸ばしていくのか、あるいは、短所にこだわるかで、子供の将来に大きな影響を与えることにもなりかねない。教育がかけがえのない大事なものであるだけに、子供達に一層確かな眼を注ぎたいものである。


編集・発行／広島市教育センター　〒732 広島市東区牛田新町一丁目17番1号　☎(082)223－3563

＝ 指定都市教育研究所連盟共同研究紹介 ＝




# 『子どもと環境』

広島市教育センターをはじめ政令指定都市の10機関が加盟している指定都市教育研究所連盟では、大都市における子どもと教育の問題を共通課題として、昭和38年の第1次共同研究以来、継続して調査研究を進めています。

第8次共同研究（昭和60～62年度）では、「子どもと環境」というテーマで、マスメディア、流行、競争社会、及び地域社会を通して子どもの姿を見つめてきました。

この度、研究の成果がまとまりましたので、その中から、主として大阪市、福岡市、広島市の各教育センターが担当・執筆した「子どもと競争社会」の一部を紹介します。

## 子どもと競争・協同

### 今、なぜ環境なのか

「人間は環境の動物」といわれている。人間はいろいろな環境との相互作用の中で生活するということであろう。特に、成長過程にある子どもたちにとって環境から受ける影響は大きいものがあろう。現在、子どもをとりまく社会は物質化社会であり、高度情報化社会である。その中で、豊かで便利な生活をしているが、人間関係の希薄さ、道徳観の欠如等失ったものも多い。こうした中で教育の課題とされているのは、教育環境の人間化、環境教育の推進等であろう。

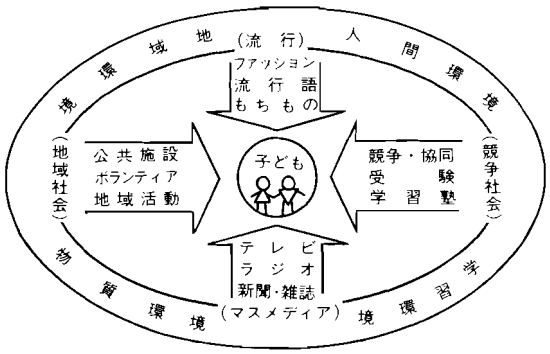



**図1　子どもを動かす「四つの環境」とその関連**

### 環境をどうとらえたか

子どもの人間形成に密接に関係する環境として、左下図のように人間環境、物質環境、地域環境、学習環境を取り上げた。その環境に切り込む窓口として「流行」「マスメディア」「競争社会」「地域社会」を考え、子どもをめぐる環境について吟味した。

### 子どもをとりまく競争社会

実力の社会になりつつあるといわれながらも依然として学歴偏重の社会的風潮は根強いものがある。評判のよい学校への入学を求めて、塾は今や第二の学校としての社会的地位を得るまでになった。また、全人教育の場とされる学校も、一般的に勉強ができることだけに価値を認める傾向が強まり、その弊害が指摘され、改めて学校教育の人間化が問われている。

こうした状況の中で、子どもたちは学校における諸活動をどのようにとらえているのであろうか。一日の学校生活の大半を送る学級では、人間関係の相互交渉の形態として多様

な競争・協同の場がある。そこで、諸活動を競争・協同の視点からとらえてみた。

**勉強では負けたくない**

子どもたちは、諸活動で友だちを意識し負けまいと努力する一方で、協同の素晴らしさも体験している。自己の確立とともに級友との競争意識は低下していくが、「勉強」については負けまいとする意識が強い（小学4年63.1%、6年56.4%、中学3年63.0%）。

家庭に帰れば、6割余りの子どもたちは成績について兄弟や友だちと比較され勉強についての奮起を促されている。また、家庭の学習環境を整えてもらったり、高い月謝を払って塾に通わせてもらったりする状況（図2）の中で、9割余りの子どもたちは、もっと勉強をしてほしいという保護者の要求を敏感に感じとっている。このような環境が勉強に強い競争意識をかりたてる要因であろう。特に、中学3年では入試を控えてその傾向が強まる。

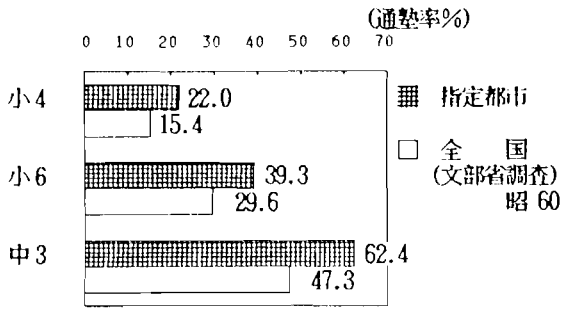
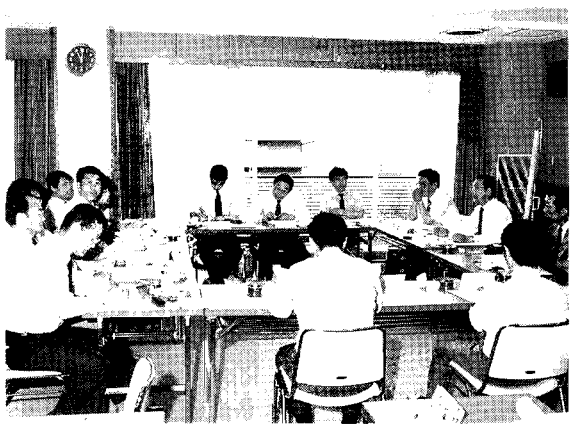



**図2　学習塾通塾状況**



**共同研究協議会**

**協力はするがリーダーにはなりたくない**

学年が進むにつれて、意欲的なリーダーではなく、やらされるリーダーになっていく。この原因は、塾や習い事（週3回以上通塾小学4年約5割、6年と中学3年約7割）に追われ、放課後に時間を取られることを嫌うようになったり、リーダーの仕事に対する認識やその責任の重さがわかるようになったりすること等が考えられる。リーダーとして頑張っている子どもは、係活動や委員会活動で協力してよかったという体験を持っているが、学年が進むにつれて、リーダーになることを敬遠する傾向にある。

**ともに高まる学級集団を目指して**

勉強ができるということで人間の価値を評価する世相の中で、子どもたちも成長するにつれて、勉強では負けたくないという意識が強くなり、その逆に社会生活に必要な協同の素晴らしさを経験する機会は減少していく。

このような子どもたちに協同の素晴らしさを経験させ、一人ひとりの個性や創造性の伸長を図り、主体的に学ぶことの楽しさを味わわせるために。

○　思いやりのある学級づくり

○　一人ひとりの良さを認める多面的評価

○　一人ひとりが目標をもち自己との競争

等の面から日々の実践を振り返ってみる必要があろう。

（広島市教育センター指導主事　**民安和昭**　指導主事　**西村達男**）

**研究紀要・研究報告書のあゆみ**

第1次　教師と非行中学生（昭和41年）

第2次　子どもの生活と教育（昭和44年）

第3次　都市の教育問題（昭和49年）

第4次　地域社会における子どもの意識と行動（昭和51年）

第5次　現代の子どもの意識と行動（昭和54年）

第6次　都市の子どもの自己形成（昭和57年）

第7次　子どもの学校観（昭和60年）

第8次　子どもと環境（昭和63年刊行予定）

# おこたえします

Q　A

＝ 教育相談室（分室）から ＝

**吃音の子どもについて**

Q　どもる子どもに接するとき、どのような配慮が必要でしょうか。

A　どもる状態を吃音状態といいますが、吃音状態が進行していくと、子どもの成長・発達上、見過ごせないことになります。

**1　吃音状態を進行させる要因**

同じ音やことばを繰り返して話したり、ことばがなかなか出てこなかったり、口ごもったりしていると、その話し方が気になって「吃音」ではないかと心配になることがあります。

しかし、このようななめらかさに欠けた話し方というのは、子どもが新しいことばを学習している過程においてしばしばみられるものです。

ところが、だれかが「吃音では」という疑いや不安をもつことによって、その子どもの話し方が気になりだします。このような気持ちが、子どもに言い直しを求め、子どもの方は話すことを気にし始め、ますますつかえたり、つかえることを恐れたりするようになるのです。

吃音の原因については、まだよくわかっていないところがありますが、このようにして吃音状態が進行し、固定化していくとも考えられています。

**2　学級での配慮**

(1)　子どもの話し方に対して、「落ち着いて、ゆっくり話してごらん」などの助言や注意をしたり、言い直しをさせたりしないことです。そうするとかえって自分の話し方を意識させるばかりでなく、不安や劣等感を大きくすることになります。

(2)　つかえたり、口ごもったり、繰り返したりして話しても、ごく自然にうなづきながら聞いてやり、途中でさえぎったり、手助けのつもりでかわりに言ってやったり、早く話すようにせかさないようにします。

(3)　自分の話し方を気にし始めている子どもについては、一人での音読のかわりにグループで斉読させるなどして、話すことへの抵抗感を和らげることに努めます。

(4)　学級の子どもたちに対しては、よい聞き手としての態度を育てるとともに、吃音への理解を深めるようにします。

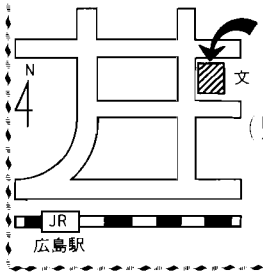
(5)　意識化がさらに進むと人前で話そうとしなくなり、殻にとじこもるようになることもあります。できるだけ楽にどもらせ、吃音を乗り越え、力強く生きようとする姿勢を積極的に支援するようにします。

素人判断・素人療法は危険です。心配になったら教育相談室や最寄りの言語治療教室で相談を受けるようにします。

（広島市教育センター指導主事　**宮河　治**）

**教育相談室（分室）案内**

―障害をもつ子どもの教育相談を行っています―




場所
東区光町二丁目15－55
（児童総合相談センター内）
電話
082－264－0422

教育研究紹介

# 技術・家庭科の評価に関する研究

広島市教育センター主任指導主事　中村道徳

広島市教育センターが実施した『児童生徒の学習意識に関する調査』（昭和58年度）から生徒の教科嗜好をみると、技術・家庭科が第1位で、その理由は「学習内容に興味がある」「みんなと協力して学習できる」などとなっている。しかし、反面「先生がわかりやすく教えてくれない」「学習のしかたがよくわからない」などの学習指導法の改善を求める声も多い。これは技術・家庭科が、実技教科であるだけに、生徒の外面的活動に目を奪われて、生徒一人ひとりの内面的な学習活動にまで目を向けていないことによるのではあるまいか。

## ○　授業過程における導入指導の工夫

生徒自らが授業に主体的に取り組み、学習課題を解決していくためには、授業過程、なかでもその導入過程を重視しなければならない。生徒一人ひとりが、生き生きとした学習活動を展開し、学習効果を高めていくためには、まず、授業の導入段階で、生徒が明確に学習のねらいを把握することが大切である。

しかも、この学習のねらいの把握に当たっては、生徒が主体的に授業に対する問題意識をもち、学習課題解決への主体性を自覚しなければ、学習に積極的に取り組むエネルギーにはなり得ない。また、学習への参加を通してはじめて要求も具体的となり、学習課題解決への見通しができてこそ、内発的動機づけの要因としての学習意欲に大きくかかわりをもつことになるものと思われる。

この研究的取り組みにおいては、導入指導の方法と学習達成状況との関係を事前・事後テストから把握し、技術・家庭科の授業における導入方法を検討したものである。研究では、下図に示す二つの導入類型についてそれぞれ実験授業を行った。

| 導入のタイプ | 導入の流れ |
|---|---|
| プロジェクト学習型導入<br>［問題解決へ向けて生徒の試行を取り入れたもの］ | 1　学習目標の価値の自覚<br>2　学習目標解決のための問題把握<br>3　解決への手順・方法の追求<br>試行活動を中心とした解決への手だてを得る<br>4　解決方法への手順・方法の決定 |
| プログラム学習型導入<br>［教師の説明・資料等の提示を中心とした系統学習的導入］ | TP、指導資料等を用いて、本時の学習内容を順に説明していく<br>解決へ向けての手順・方法は教師活動が中心 |

二つの導入タイプ別に学習効果の伸び率(学習効果率)をみると、導入時に作業を伴う試行活動を取り入れたプロジェクト型導入の方がすぐれており、また学習意欲の高いことがわかった。

## ○　生徒の個性や能力に応じた学習成果のフィードバックの改善

学習における評価機能としては、学習成果を個々の生徒にフィードバックさせて、次の学習活動への意欲づけとすることや、教授活動をどのように改善していくかということが考えられなければならない。得点からだけでなく、生徒の性格や能力に応じたフィードバックを考える必要がある。

市販の心理検査による生徒の個性とフィードバックの仕方との関係を調べてみると、生徒の「活動性」「教科の嗜好」「自信・意欲」「成績の良否」などに応じて、賞賛・激励・説明・補説など適切なフィードバックとその方法が考えられなくてはならないことがわかった。

# 広島市立学校教育研究生紹介

本年度は22名の先生方が9月から11月の3か月間、当教育センター及び在勤校において研修をされました。今回は、道徳に関する研究の概要を紹介します。

**研究内容**

## 自己を出しきる道徳の時間の指導法

広島市立青崎小学校教諭　菅田祐司

児童が本音を出し、心をひらき、楽しいと感じることのできる道徳の時間を作り出すために、授業展開に表現活動を取り入れた実践的研究を行った。

**主題名　「二つの勇気」（第5学年）**

〈ねらい〉

真の勇気の意味を知り、正しいことは勇気をもって実行する態度を育てる。

### 1　問題場面を把握させるための表現活動

明はベルを押すことができなかったが、その後で和男は押して来た。和男は勇気があると言われた。その時の明の心のつぶやきを吹き出しに書かせる。

児童から多様な考えを引き出すとともに、主人公の気持ちを明確にとらえさせ、主人公と同一化してその心情にひたらせるために吹き出しの形で表現させることにした。この学習活動の結果、

- 児童が多様な考えを出すことができた。
- 一人ひとりが主人公に共感し、自分とは異なる考え方があることに気がついた。

### 2　道徳的価値を自覚させるための表現活動

話の後半の筋書きを考えさせ、主人公の立場・心情を自分のこととして感じとらせ、どのように振る舞えばよいのかということを動作化させる。

- 自分なりの表現をすればよいので全員が活発に動作化した。
- 二人組で交代して行わせることによって自分とは異なる価値観があることに気づかせることができた。
- 正しいと思うことを実行するのは容易ではないことを十分感じとらせることができた。

### 3　終末の工夫としての表現活動

授業の終末は画一的、固定的でなく、余韻を残して終わりたいために「勇気一つを友にして」という歌を歌わせた。

**研究のまとめ**

○　全員参加の授業になり、多様な価値を引き出すことができた。

○　自分と友だちの価値を比較し、価値の認識が深まってきた。

○　登場人物になりきることにより、他人の痛みがわかり共感できるようになった。

○　資料の場面把握が容易になった。

○　道徳の時間を楽しく感じるようになり、実践意欲が高まってきた。

## 研究主題

**国語科**

読みと書きとの関連指導による説明文作成の指導法について

広島市立三田小学校教諭　新元龍児

**算数科**

基本的な図形概念形成の指導法に関する研究

広島市立河内小学校教諭　水戸静真

数量関係を把握させるための指導の在り方

広島市立阿戸小学校教諭　佐々木ちえみ

**理科**

科学的思考力を育てる指導法の研究

広島市立己斐上小学校教諭　山田宏康

燃焼反応における教具の工夫と指導法の研究

広島市立高陽中学校教諭　野村稔

**社会科**

教材提示の効果的な指導に関する調査研究

広島市立安佐中学校教諭　遠藤秋実

**図画工作科**

「絵で表す」における鑑賞の指導

広島市立真亀小学校教諭　福田悦子

砂浜における「造形的な遊び」に関する指導法の工夫

広島市立元宇品小学校教諭　楠田賢二

**家庭科**

実験を取り入れた授業展開の工夫

広島市立戸坂城山小学校教諭　大上友子

**技術・家庭科**

簡易材料試験機の設計と製作

広島市立三入中学校教諭　中山秀紀

**体育科**

課題達成を喜ぶ体育学習

広島市立原小学校教諭　西村正晴

**英語科**

英語学習意欲を持続させる指導法についての研究

広島市立五日市中学校教諭　西本純江

**道徳科**

道徳的価値を主体的に自覚させるための指導法の研究

広島市立五日市観音西小学校教諭　砂原宏幸

自己を出しきる道徳の時間の指導法

広島市立青崎小学校教諭　菅田祐司

**特別活動**

思いやりを育てる学級会活動の指導法に関する研究

広島市立牛田小学校教諭　今田龍二

**障害児教育**

知恵おくれの生徒の作業能力を高める指導に関する研究

広島市立広島養護学校教諭　菅方幸司

**特殊学級**

学習活動に参加できにくい児童の個別指導の工夫

広島市立白島小学校教諭　伊東陽子

**生徒指導**

生徒の意識と行動のズレについて

広島市立安西中学校教諭　桑原郁文

**学力向上**

S－P表の活用による形成的評価の実践

広島市立船越小学校教諭　西東優二

S－P表の活用によるつまずきの診断とその指導法について

広島市立広島工業高等学校教諭　藤原清貴

**幼稚園教育**

喜んで表現する子どもを育てるための指導法の研究

広島市立川内幼稚園教諭　宮崎礼子

共に育ち合う学級づくり

広島市立大町幼稚園教諭　合原晶子

◀研究報告会

広島市学校教育史点描(3)

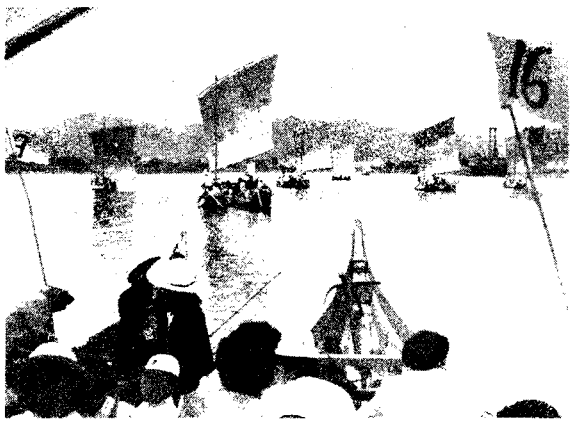
# 潮干狩遠足

広島市教育センター
指導主事　松田了二

田安佐郡下の小学校の創立百周年記念誌を見ていると、春5月ころ、川舟で江波や吉島沖へ潮干狩に出かけたことが書かれていた。村内の学校が合同で出かけた記録や、20そうの帆掛け舟に全校児童400人が分乗して川を上る壮観な写真も載せられている。

海に近い所では、4・5月の大潮のころに、貝がおいしくなり、陽気も暖かくなることもあって、昔から家族連れで潮干狩に出かけたという。この潮干狩が、大正末か昭和の初めころ遠足と結びついて学校に取り入れられたのであろう。

子どもたちにとって、この潮干狩遠足は年に一度の楽しい学校行事であった。しかし、昭和20年代末には川舟が衰退し、さらに、楽々園、地御前とかなり遠方まで出かけなければ貝が採れなくなって、40年代半ばには記念誌から完全に潮干狩遠足の文字が消えている。



〔写真上〕　八木小学校記念誌「しらうめ」より
〔写真左上〕　緑井小学校所蔵写真帳より

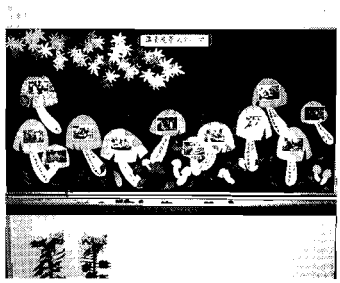
## 教育センターひろば

### 講演会

講師に児童文学者岩崎京子先生をお迎えした教養講座に、700名の方々が参加されました。

### 研修写真展示

教育センター2階廊下に、研修講座の写真を掲示しています。教室経営の参考にもなると大変好評でした。



### 編集後記

教育実践のまとめや新年度への準備などに、お忙しい日々を送っておられることと思います。今回は、教育研究を中心に編集してみました。御活用ください。